

仏、ポルトガル、スペイン・スピリチュアル紀行（2013年5末～6末）

2013年8月27日 森川浩司

始めに

昨年は2ヶ月をかけてスペイン・サンチャゴへの巡礼を行い、多くの素晴らしい出会いとスピリチュアルな奇跡体験をした。今年フランス・ノルマンディーの町ルーアンを訪れ、1431年に異端者として火刑死した **Jeanne d'Arc**（ジャンヌ・ダルク）の足跡に触れること、そしてポルトガルの巡礼地として最も有名な **Fatima** の町に行き1917年聖母マリアが出現した奇跡の追体験をすることだ。また、昨年やり残した2点、サンチャゴ大聖堂での大香炉回しを見ることと、スペイン最西端 **Fisterra** への巡礼旅も体験するつもりだ。例によって約10kgのリュックと寝袋を持っての30日間の行程だ。さて、どんな旅になるのだろうか。

ルート

ルートは： 東京～パリ～ルーアン～パリ～ポルト～ナザレ～ファティマ～サンチャゴ～フィステラ～サンチャゴ～ポルト～パリ～東京 である。飛行機は東京～パリ間とパリ～ポルト間。後は汽車やバスや徒歩。巡礼宿は行き当たりばったり、安宿は **Booking.com** で予約し、切符は当日窓口で手に入れる。さー、出発しよう。



ジャンヌ・ダルク

ミラ・ジョボビッチのジャンヌは格好よくって彼女のイメージが抜けなけれど、ジョボビッチを知らない人でもジャンヌの名前は知っている。それほど有名なのだが、その実、彼女の生涯も時代も余り知られていない。13歳で神の声を聞いてからフランス統一を助けるという、驚くべき働きをして19歳で敵国イギリス軍に火刑死させられた実在の人物。そんな彼女の一端にふれるべく、生前最後の6ヶ月間幽閉され異端裁判を受け刑死し、その25年後に復権宣言された場所、フランス北部ルーアンの街を訪問することにした。



(写真：ジャンヌの騎馬姿、オルレアン市解放凱旋： ルーアンの旧市街)

約600年前に起きたこの農家の一少女が起こした奇跡の詳細は、1431年に行われた「異端裁判」と1455年に開始され7ヶ月で結審した「復権裁判」の両議事録が幸運にも現存しており(日本語訳本も出ている)、実際に何が起きていたのかを多くの証言から知ることができる。

その概要を抑えておくと、当時のフランス内部の勢力図はばらばらで、北西部はノルマンディ公のイギリス領であり、彼とイギリスはさらに勢力を南へと伸ばすべくシャルル王(7世)率いるフランスと100年戦争(1337-1453)中であつた。1429年ジャンヌ17歳は、神の声に従い”オルレアン市の包囲解放”と”シャルル王の聖別と戴冠”を行うべく意を決し立ち上がり、シャルル王太子に謁見、3週間に渡る査問を経て、甲冑と白い騎馬を与えられ自ら考案した天使を描いた旗印を掲げて凛々しい姿で軍に迎え入れられた。

早速、イギリス軍に半年に渡って包囲されていたオルレアン市解放戦線に参戦、わずか数日でこの街を解放してしまう。さらにそれから僅か2ヵ月後にはシャルル王太子をフランス王位継承宣言の儀式(聖別と戴冠式)に導き、100年戦争の原因でもあつたフランス王位の問題を解決してしまう。神の役割を終え、シャルル王からも褒美として、出身村の課税免除とジャンヌ一家の貴族への列しを得て、ここで身を引けば、めでたしめでたしだったのだが、



(写真、左から：ジャンヌが投獄されていた塔： 火刑場： 異形のジャンヌ教会)

軍は幸運の女神を手放すべくも無く戦いにかりだした。残念ながらその後の彼女はまるで神に見放されたかのように、負傷、敗退の連続で翌年 1430 年 18 歳の時にノルマンディ軍に捕虜になり、さらにイギリス軍に売られ、翌年異端裁判にかけられ、彼女の全ての行動は神から出たものではなく悪魔からでたものだ（だから王位継承儀式も無効）と結審し彼女は火あぶりになる。1431 年享年 19 歳。

しかし、フランス王軍はその後 20 年を経て全てのイギリス軍を駆逐、1453 年に 100 年戦争が終結した。その 2 年後シャルル 7 世はジャンヌの復権裁判を命じ、1456 年 7 月、火刑となった同じルーアンの大司教公邸で前判決破棄宣言がなされ、彼女の復権が確定した。その約 460 年後の 1919 年ジャンヌの列聖がバチカン公国により承認され、ジャンヌは「聖ジャンヌ」となる。

シャルル王は恩義を忘れぬ立派な人だったし、ジャンヌによって解放されたオルレアン市民も義理堅く、シャルルのお母さんを名誉市民として迎え入れ、住む場所と年金を生涯与え続け、今でも解放後ジャンヌが入城した 5 月 8 日を記念してオルレアン祭を毎年行っている。ジャンヌの無念はあるだろうけれど、歴史を振り返ってみるとストーリーとしてはハッピーエンドといえるのではないかな。

ルーアンの街

フランス北部一帯は今では何の疑いもなくフランスだが、実は 9 世紀ごろヴァイキング(ノルマン人：北の人) が侵攻して住み着いた地域で、今でもノルマンディーと呼ばれ、フランク人(ゲルマン民族の一部族) が築いたフランスとは人種も歴史も異なっている。

そのノルマンディーの首都であるルーアンは、ジャンヌの時代には、イギリス海峡に面しセーヌ川の河口という地理的条件からイギリス軍の主要拠点として発展していた。今では、「町そのものが美術館」といわれるほど歴史的建造物が多く、また 19 世紀末に生まれた絵画の印象派運動の発祥の地でもあることから「芸術の街」のレッテルも持っている。



(写真、左から：ルーアン駅、ルーアン全貌、印象派絵画のようなセーヌ川舟遊び)

パリ北駅近くの宿からリックを背負い見当をつけた方向にぶらぶら 30 分、サン・ラザール駅に着いたときには汗ばんでいた。ルーアン行きの汽車は 2 時間に 1 本ほど出ている。フランス国鉄にもシニア割引があり 1 時間半の距離で 18 ユーロとまーまーの運賃だ。スーパーで買ったバケットサンドを食べながら車窓を眺めているうちにルーアン駅に着いた。

小高いルーアン駅からセヌ川に緩やかに下る2 kmほど伸びているメインストリートが「ジャンヌ・ダルク大通り」で、かつての敵地でも今は受け入れられているようだ。宿の場所を探すのに苦労して、あるレストランのお客に案内してもらったことになったが、彼女によると昨日ジャンヌ・ダルク祭が終わったと言われ、がくっときた。どうやら幸先は良くなさそうだ。

次の日からは雨、カップ姿で精力的にジャンヌに関する場所を訪問する。 幽閉されていた「ジャンヌの塔」に登り、アジサイが咲いている火刑場で悲劇を偲び、不思議な形のジャンヌ教会で冥福を祈ったが、何も感じないしピンとこない。どうやらその原因は理不尽な死をとげた無念のこの地にあるようだ。ジャンヌを辿るには、やはり生まれ育った、ドイツとの国境に近いドムレミイ村や解放した町オルレアンを歩くべきだったようだ。そこでなら感動も生まれたかもしれない。しかしただの一農民少女を動かした”大いなる力”は、当時の神学最高峰パリ大学の多くの博士らによる分析結果と二つの裁判証言記録からみても、そこには何かあったという事実を否定することはできない。スピリチュアル世界の存在を確認できたようにおもう。

翌日からはジャンヌはとばし、「印象派の故郷」としてのルーアンとセヌ溪谷を楽しむことに方向転換した。その日も雨、でも美術館廻りには格好の天気と自身を励まして、丁度、第2回印象派展を開催しているルーアン美術館を堪能する。駐在のころは良くパリ・オルセー美術館でセヌ河岸の変わり行く光の淡い絵画を見たものだが、ここルーアンがモネ、シルレー、ルノワールなど印象派の本拠地だったとは嬉しい誤算だった。

さらに次の日は、モネがルーアンの全貌を写生したセヌ溪谷の高台に登ることにした。ルーアン駅近くの宿からジャンヌ大通りを下りしばらくジグザグの坂を登り2時間ほど歩くと、街を一望に見渡すことのできる高台に着いた。パノラマの左端には国鉄の陸橋が、中ほどにはゆったり流れるセヌ川。そして小高い山々に後ろを守られたルーアンの街が、モネの有名な連作のモデルにもなったノートルダム大聖堂の尖塔(152メートル)を中心に広がっている。流れる雲が晴れ、ぱーっと明るく照らされた旧市街は正に絶景だ。”わたしに画才があったら”とないものねだりがつい出てしまうほどだった。



(写真、左から：ルーアン旧市街、モネの書いた街全貌、ある画家の釣り糸をたれる老人)

ポルトガルのナザレ

キリスト教をかじった人にとってナザレと聞くと”あー、イスラエル・ヨルダン渓谷にある山地でイエスの育った地”だと知っている。それが、何でポルトガルにあるの？何で海岸なの？という疑問がわいてくる。ポルトからバスで約 4 時間、その疑問を解くためにやってきた、と言うよりは、この地はリゾート地という話なので、雨のルーアンの後、太陽の下、少しのんびりしようとやってきた。宿は海岸から 20 分ほどしんどい丘を登った所にある台所つきのアパート。裏が町一番の大きなスーパーなので自炊が楽しみなロケーション。6 月はシーズンオフ、ここに 3 泊しよう。

町の名前ナザレの由来を抑えておくと、8 世紀にロマノというキリスト教僧が携えていたマリア像がイスラエル・ナザレのもので、彼の死後、聖母マリアの奇跡で当時の城主が命拾いをしたりして、そのマリア像を教会に置き（ノッサ・セニウラ・ダ・ナザレ教会）町の守護聖人として祀り現在に至っている。今でもこの地はポルトガル人の巡礼の対象として有名で、かつてはあのバスコダ・ガマ（1500 年頃喜望峰を回航してポルトガル領インド総督になった）も巡礼したそうだ。

長い弓のように続く海岸に沿っているリプブリカ通りには、多くのレストランやみやげ物屋さん、そしてこじんまりしたホテルがぎっしり並び、ハイシーズンには江ノ島海岸通りのような賑わいを見せるのだろう。今は砂浜に寝そべったり、散歩したりしている家族ずれや恋人らがのんびりと時間を過ごしている。この小さな街は、周りを中心に高い崖と小高い丘に囲まれ、崖上の展望台からみる大西洋の海岸線の美しさ、どこまでも青い空、汗をかいた身体を癒す心地よいブリーズ(風) は忘れがたい。



(写真、左から：ナザレ海岸を望む、ナザレ教会、イスラエル・ナザレからの聖母マリア像)

ナザレでの毎日は、海は冷たく泳げないので周りの丘へのトレッキングや海岸線の散歩、この小さな街には不相応な現代的で立派な図書館通い(PC,Internetが無料)そして毎食事の料理だ。パイヤ、海老、パスタそして冷えた白のスパークリングワイン、サラダにバケット。。至福の時でした。

ポルトガルの巡礼地ファティマ

ポルトガル人で「ファティマの奇跡」を知らない人はいない。またクリスチャン世界から多くの巡礼者がやってくるこの地は、第一次世界大戦中の 1917 年に聖母マリアが毎月現れてこの地に礼拝堂を建てる事と 3 つの預言を残したと言われ、それ以来カトリックの聖地となり年間 200 万人の巡礼者を受け入れるためにこの町が造られたそうだ。

ナザレの心地良さに後ろ髪を曳かれながらも、威を振るって図書館裏から発つ市バスに乗り込む。途中でバスを乗り換え、山を越えながらおよそ 2 時間で、森を切り開いた巡礼だけのための町ファティマに到着した。町は、ビルもホテルもアパートも立ち並ぶ普通の町の様相を示しているが、その中心には 30 万人を収容できる巨大な広場と、その先には、カトリック大本山のバチカンをも凌ぎそうな、65m の塔をもつ大きなバジリカ（大聖堂）が建っている。宿はバス停から歩いて数分の所にあるカナダ人経営のホテルで、英語が通じ、蠟人形館の割引券や巡礼用の安い靴屋さん、近くの鍾乳洞の行き方などレセプションистから色々な情報をもらうことができファティマでの数日はあっという間に過ぎてしまった。



(写真、左から：広場とバジリカ、1917 年 10 月 13 日集まった人々の写真、蠟人形館：聖母マリアが 3 人の子どもたちの前に現れた場面)

さて、お待たせしました。「ファティマの奇跡」って何？を蠟人形館に入って見てみましょう。ここでも何か大きな力が働いたようです。時は 1917 年 5 月 13 日第一次世界大戦中(1914 年~1918 年)、7 歳、9 歳の兄妹と 10 歳の従姉妹の 3 人が泉のそばで羊番をしていると、そこに光がさし聖母が現れ彼らに告げた。” 10 月まで毎月同日同刻同場所にわたしは現れます” と。子どもたちは両親や神父らにその話をして 6 月 13 日を待ちます。大人たちには見えなかったが聖母はやはり現れ子どもらに話をした。このことがうわさになり最後の 10 月 13 日には、近隣の村や町からなんと 7 万人もの人たちが集まり聖母の出現を待ちました。子ども 3 人が祈ると降っていた雨が止み、7 万人の前で太陽が火の玉のように回り、3 人だけに聞こえる声で、この場に礼拝堂を建てること、そして 3 つの預言を伝えました。(この戦争はやがて終わること、二人の子どもは死者の国を訪問すること、そしてバチカン教皇が銃撃されること。) その後、預言通りに、戦争は終わり、兄妹は子どものまま天に召され、そして 1981 年 5 月 13 日バチカン教皇パウロ 2 世が撃たれ重傷を負う。残った従姉妹はそのまま修道院に入りその後聖職者になりパウロ 2 世が召された同じ年 2005 年に 97 歳で昇天した。

このように、この奇跡は手が届くほど新しく、信仰の生々しさが感じられる。今でもこの町は毎年5月から10月まで世界各国から巡礼者が集まり、バジリカ前の広場は10万人にも及ぶ人々で埋め尽くされるそうだ。わたしも歩いたが、聖母を見た子どもたちの生家がある村へは徒歩30分ほどで行け、巡礼のコースにもなっている。また彼らはバジリカの中に眠っている。

人々はどんな目的でこの地を訪れるのだろうか。奇跡の場所を実際に見てみたい、その場で何か感じてみたい、自分あるいは親しい人に奇跡を起こし願いを聞き入れて欲しい、世界の戦争を終らせて欲しい、観光、物見遊山などなど、人それぞれにその理由はあるのだろう。わたしはと言うと、この奇跡が本当に起こったのだという確信を持ちたくて現場に来てみたかった、そして、自分の足で歩いてみて、祈ってみて、信じられるという気持ちになった。遠路はるばる来た甲斐はあったように思う。



(写真、左から：聖母に会った3人の子ども、広場の十字架、5月13日夜の広場、人の波)

ボタフメイロ（香炉振り回し）

ポルトの先のバルセロスから今年の巡礼旅を始めた。北上するこのカミーノ（道）は昨年も来ているので歩きやすいが、二度目なので刺激は少ない。目的地スペインのサンチャゴ・デ・コンポステラへは約200kmの道のりだ。昨年は曜日の加減で、聖ヤコブ教会で行われるこの有名な儀式ボタフメイロ（現地のガリシア語で煙を吐き出すもの）を見ることができなかったため、今年は慎重に日程を調整した。

1週間ほど歩き、やっと目的地のサンチャゴに着くという日、途中のカフェに立ち寄ると新聞に載っている日本人の写真が目についた。近くの人に聞いてみると、今日サンチャゴの大聖堂に日本の皇太子が来るとのこと。これは行ってご挨拶をせねばと脚を早め、息せき切りながら大聖堂前の広場に到着した。広場の半分には立ち入り禁止のロープが張っており、警備は厳重で、空にはヘリコプターが警戒している。多くの市民と一緒に歓迎のためにロープ脇で待っていると、殿下は屈強な現地SPに守られて直ぐに車に入り巡礼路に行ってしまった。この間、わずか数分だった。翌日の新聞を見ると、杖を持って最後の数Kmを歩く巡礼姿が載っていた。皇太子の正式名は徳仁親王、称号は浩宮。わたしの名前「浩司」の一文字が使われている。



(写真：ホテルから出て車に乗る殿下、翌日の新聞一面、大聖堂前の広場でデンマーク人と)

さて、ボタフメイロに戻ろう。殿下が巡礼に出発した正午ごろ、大聖堂内で行われる巡礼者のためのミサに出席した。スペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、英語での祈りが終わり、讃美歌が捧げられ、香炉に炭と香がくべられ、8人の赤いローブをまとった僧たちが、滑車から伸びている太いロープをひっぱり、煙の出ている香炉をブランコのように揺らし始めた。次第にその揺れが大きくなり、聖堂内の端からはじまてぶらーん、ぶらーんと動き始め、香のにおいと煙が聖堂内に満ち始めた。

物の本によると、この香炉は 1851 年に作られたもので、それ以前のはナポレオン軍が 1809 年フランスに持って行ってしまったそうだ。今の香炉は世界最大で高さ 1.6 m、重さ 80 kg の銅に銀メッキをほどこしたものだ。香炉の振り回しの弧は 6.5 m を描き、2.1 m の高さにまで上がり、そのスピードは時速 68 km にもなるそうだ。もともとはペストや伝染病予防のため 11 世紀に始められたようだ。

聖堂内は人でぎっしりで、何人か知った顔があり、何人かとは挨拶をかわしたが、ミサ中は私語禁止。やっと体験できたボタフメイロは思ったとおりのスケールの大きさで、目と鼻で十分に味あうことができた。これで、サンチャゴでの用は終わり明日からはスペイン最西端の港町、フィニステラ（フィステラとも言う）に向かおう。



(写真：大聖堂、ボタフメイロ振り回し、大聖堂前広場でオランダ人と)

スペイン最西端フィニステラ

サンチャゴからフィニステラまでは約90 km、歩いて3日ほどの距離だが山を10ほど越えなければならないことと、海に近づくと天候不順になるのが面倒だ。日程の関係から帰りはバスを使うことにする。

日本から履いてきた立派な革の登山靴は重くてファティマのホテルに置いてきた。代わりに中国製の軽いトレッキングシューズを買い使い始めたが、やはりしっくりせず、これも巡礼中に捨ててしまって、今は日本から持ってきていたユニクロのスリッパを履いている。この先の行程は最後のパリも含めて全てスリッパでとおすことになる。超格好が悪いし、余りにも貧しそうなので泥棒さえ寄らないメリット？がありそうだが、これが足にとって一番楽なのだからしょうがない。

日曜日の朝にサンチャゴを出発、雲行きが怪しいので急ぎ足になる。低い山を2つ越え、とても牧歌的な村々を抜け、美しい川に沿って歩き、中世の石橋を渡る。素晴らしい巡礼路だ。フィニステラへはそれほど多くの人歩かないので空いている。20 kmを越えると履物がスリッパではさすがに疲れてくるが、巡礼宿のある町までは残り数 Km だ。小雨がぱらついてきたのでカッパを着る。矢印に従って最後の森を抜けると立派な鉄筋コンクリートの巡礼宿が出てきた。ここの経営は教会系ではなく、私設なので利用料は倍の1200円ほどだが設備は素晴らしい。夜中に隣のフランス人男性のイビキに起こされ、空いている離れた場所にあるベッドに移動した。

月曜日は30 km歩く予定だったが、小雨がやまないで途中の村のカフェに併設されている巡礼宿に泊まることにした。途中パリから延々と歩いていると言う20代日本人男性と一緒にいる。彼は既に2ヶ月歩いており、山岳部の経験があるのでテントを携帯していて宿は余り利用しないそうだ。大学を卒業してこの旅に出たそうで、きっと何かを掴んで帰るのだろう。雨の中を先に進んでいった。ブエン・カミーノ！（良い旅を）

夜カフェで食事していると、全身ずぶ濡れの大男が黒のポンチョ姿でやってきた。事前に電話連絡してあったようで離れの部屋に入っていた。そのとき彼が低く太い声で言った言葉”I'll be back!”（俺は戻ってくる！）に近くにいたフランス人と顔を見合わせてしまった。このフレーズはターミネーターの有名なセリフで、彼の異次元的姿にぴったりだった。（本当の彼はテキサスからの40代、一日45 km歩くそうだ、やはりターミネーターかも）



（写真：雨上がりを歩く、巡礼宿庭でポルトガル人若者と、サンダルと足の裏のチェック）

火曜日は、昨日の遅れを取り戻すべく早朝 6 時に出発。天候は曇り。雨さえ降っていなければよしとする。順調に歩いて 8 時間経過、33 km 歩いた。途中、この巡礼で一番大きな男に会った。2m7cm ドイツ人 30 代。歩幅が大きく歩くのが早い。話していても首が痛くなるので先に行ってもらった。また、76 歳スイス人（本人はイタリア人と言っているが）から宿を教えてもらったのでそこに泊まることにした。宿は新しく清潔、広々としており文句なし。(1000 円) スパゲティとサラダを自炊し、イビキにも悩まされずゆっくりと休むことができた。

水曜日、今日も小雨で寒いくらいだ(15°C)。カッパで身をつつみ、滑らないようにゆっくりゆっくりと歩を進める。山を越え、半島の上からやっと海が見えるが、目的地まではまだまだありそうだ。海に近づいていくと 5 km ほど先に割と新しい赤い屋根の家々が密集しているのが見える。そう、そこが今回の最終目的地、スペインの西の果てフィニステラの町である。

町の対岸の山の斜面にある白い別荘の前で、そこを通る巡礼者に、若い女性(実はドイツ人で呼び込みのバイト中) が巡礼宿のパフレットを配っていた。英語だったので少し話をしてみたところ、この別荘も各階ごとに貸すそうだ。これで巡礼も終わりだし少し贅沢をしようこの別荘の最上階を 2 日間借りることにする(1 万円)。2 LDK 海にせり出したバルコニー付きだ。問題は町からかなり離れているので買出しは海岸を 1 時間以上歩いて行き、帰りは買い物袋を提げてまた 1 時間歩かなければならないことだ。でも巡礼の毎日に比べればたいした距離ではないと自身を納得させた。天気は、曇り時々小雨と残念だがフィニステラの町をバルコニーから眺め飲むワインは最高だ。 **Ende gut alles gut !** (終りよければ全てよし) とドイツ語が頭に浮かんだ。



(写真：中世の橋を渡る、自称イタリア人と、借りた別荘からのぞむフィニステラの町)

終わりに

今回の旅も守られて無事に帰宅できた。留守を預かってくれた妻にこころから感謝している。さて、総まとめとして、この旅を通じて、自身の人間性は高められたのか、そして自身のたましいは磨かれ成長したのか？その判断はやはり妻に委ねることにしよう。

歩き慣れたせい、家に帰ってからは、買い物もジムも日常行動は全て徒歩での生活になった。足腰を鍛えてまた次回の旅を楽しみたい。